

1 研究主題

「自身の外国語表現に広がりをもたせ、対話を続けようとする子供の育成」

2 研究主題について

(1) 研究総論との関連

外国語活動・外国語科では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションを図るための素地や基礎となる資質・能力の育成を目指している。授業においては、その資質・能力の育成を目指し、“聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと”といった言語活動を通して実現を図っている。母語とは異なる言語を扱う為、相手の話している内容を理解できない場面や、自分の考えを思うように言語化して伝えることができない場面など、困難さに直面することが授業の中で見受けられる。そういった場面で、学びを継続し、更に深めていくための支えになるのが、学びに向かう意欲と粘り強く取り組もうとする姿勢である。本校外国語活動・外国語科では、研究総論に示されている、他者と「ともに学び」、粘り強く「学び抜く」姿を実現するために、非認知能力の領域である「意欲」と「粘り強さ」に焦点を当て、研究を進めている。

本年は3カ年研究における2年次にあたる。昨年度、「自身の外国語表現に広がりをもたせ、対話を続けようとする子供の育成」を主題に掲げて研究を開始した。相手のことを知りたい、相手に伝えたいという意欲や、より良い外国語表現について試行錯誤しながら考えていく粘り強さといった学びに向かう力が伴わなければ、表面的なやり取りになってしまい、自身の外国語表現に広がりや生み出されないと考えたためである。第3学年と第5学年にて実践を行い、意欲に働きかけるアプローチの効果と、その後の対話場面での粘り強さにつながることを子供たちの姿や成果物から確認することができた。特に効果が顕著に現れたのは、粘り強さへの影響である。先に述べた通り、英語は外国語である。母語である日本語と比較すると持ち合わせている語彙の総量が絶対的に少ない。その中で対話を継続することは指導者の想定を遥かに上回る負荷が子供たちにかかっているであろうことは想像に難くない。そこで、指導者が意図をもって意欲に働きかけること、外国語を用いる場面や必然性を認識できる環境を設定すること、情意フィルターを下げるためのアプローチを授業内にしかけとして設けること等を意識して単元を構成し、実践を行ったのが研究初年度であった。学びの過程で外国語表現に広がりや、対話の場面では思いを伝えるべく粘り強く取り組む姿として見取ることができたのは初年度の成果であると考えられる。外国語活動・外国語科では、「意欲」や「粘り強さ」といった非認知能力を高めることで言語活動を充実させていくことが、本校の目指す「ともに学び、学び抜く子供」の育成につながると考え、今年度も主題を継続して研究を進めていく。

(2) 外国語活動・外国語科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の姿について

「自身の外国語表現に広がりをもたせ、対話を続けようとする子供」

外国語活動・外国語科では「ともに学び、学び抜く子供」の姿を、研究主題でも示したように、「自身の外国語表現に広がりをもたせ、対話を続けようとする子供」と表現している。外国語科は4技能5領域に渡る言語活動を通して行われる。我々が考える言語活動を行う際に最

も大切なことは、相手意識をもつということである。「相手のことを知りたい」、「自分のことを（相手に）伝えたい」という純粋な気持ちが全ての言語活動の土台であると考え。相手意識をもつことが、自身の外国語表現に広がりをもたせる原動力となり、それが具体的な様子として現れたのが対話を続けようとする姿であると定義する。昨年度の研究（研究初年度）では、「意欲」と「ねばり強さ」に働きかけるアプローチを単元構成の中に意図的に組み込み、子供たちの学びにどのように影響するかを検証した。そこで明らかになったのは、本校が目指す姿と、外国語科の目指す姿との近似性である。定型表現や語彙の入れ替えで満足せず、自らの思いを加えて対話しようとする姿は、ともに学び、学び抜く姿勢につながるものであると考える。これを受けて、ともに学びながら自身の外国語表現に広がりをもたせ、対話を続けようとしながら学び抜く姿を目指すという方向性が定まった。併せて、具体的な姿を通して子供たちを見取っていくことの重要性を認識する機会となった。研究2年次の本年は、研究主題を継続しつつ、より具体的に子供の姿を追いながら外国語活動・外国語科の授業を実践していく。

3 研究内容

(1) 外国語活動・外国語科における「意欲」「粘り強さ」に働きかける授業づくりについて

「自身の外国語表現に広がりをもたせ、対話を続けようとする子供の育成」を目指す上で、本校外国語活動・外国語科で「意欲」と「粘り強さ」の関連を視覚化したものを以下の図1に示す。

図1 本校外国語科における意欲・粘り強さのイメージ



「意欲」と「粘り強さ」を明確に分けることは困難である。しかし、外国語科において意欲とは、粘り強さを支える要素として捉えることができるのではないだろうか。鹿毛(2019)は意欲を「欲求」と「意思」の複合語であると説明している。つまり相互補完的に絡み合っている状態であると考えられる。関係意欲により支えられている状態が、粘り強さであり、粘り強さが発揮されることで更に意欲を高めることが可能となる。それらが具体的な姿として発現しているのが表現の広がりであり、対話を続けようとする姿である。

「意欲」と「粘り強さ」を上記のように捉えることで、授業づくりにおいて、「意欲」には働きかける手立てが、「粘り強さ」には支えるための環境づくりが必要であることが分かる。

「意欲」「粘り強さ」に働きかける授業づくりについて

① [子供の想いに寄りそった目的・場面・状況の設定]

意欲的に言語活動へ向かうためには、相手のことをもっと知りたい、相手に自分のことをもっと伝えたいという相手意識をもつことが重要である。相手意識をもつことで、子供たちは意欲的に言語活動へと向かい、より良い外国語表現について興味を広げていくことができる。鹿毛(2019)は、興味には、にわかには生じてはすぐに消えてしまう表面的な興味と、頭や心の片隅に常に存在し続ける真の興味の2種類があると述べている。教育実践の最も重要で、かつ困難なテーマは、いかにして子供たちに真の興味を引き起こし、それを価値ある学びへとつなげていけるかであるとも述べている。外国語活動・外国語科では授業において様々な言語活動を行うが、目的・場面・状況を子供の想いに寄りそったものにするすることで、自然に相手意識をもつことができる土台を築く。適切な目的・場面・状況を設定することで、相手のことをもっと知りたい、相手に自分のことをもっと伝えたいという相手意識をもち、意欲的に言語活動へと向かうことができるようにしていく。

なお授業における言語活動の様子を見てみると、コミュニケーションを図る際に、自分のことを中々相手へ伝えることができない子供の様子も見受けられる。相手と自分の双方向のコミュニケーションだけでなく、相手のことを第三者へ伝える等、目的に応じて様々なコミュニケーションの形態を用意し、多くの子供たちが意欲的に言語活動へ取り組めるような場面設定を行う。

② [情意フィルターを下げるアプローチ]

子供たちが意欲的に言語活動へと向かう上で障害となる要素として、心理的な側面が挙げられる。子供たちにとって外国語は母語である日本語とは異なり、語彙や文法を含む言語材料が乏しい状態にある。その中でコミュニケーションを行うということは、子供たちにとって心理的なハードルが高いと考えるのが自然である。Krashen(1981)の提唱した情意フィルター仮説(affective filter hypothesis)に立脚して考えると、情意面が障害となり、言語獲得装置へ送られるinputが減り、それに呼応してoutputも減少していく状態である。苦手意識や不安感は本研究において伸ばしていきたい非認知能力(意欲・粘り強さ)を減退させる要因となり得る。既習表現をSmall talkの中に自然な形で取り入れることで、十分に音声で聞かせる機会を増やしていく。それが子供にとって無理のないinputを増やし、自信をもってoutputができる状態につながるものと考えられる。子供の目線を大切にしながら授業を構成していくことが情意フィルターを下げ、同時に意欲や粘り強さといった非認知能力を高めることにつながると考える。外国語表現に広がりをもたせる姿も、対話を続けようとする姿も、上記の内容を意識した実践の先に発現するものであると考える。

「意欲」「粘り強さ」の見取りについて

先述した1年次の成果を踏まえ、2年次ではより具体的な姿を通して「意欲」や「粘り強さ」を見取っていく。集団で行う学びも最終的には一人一人の個に還元されていくものである。個の変容を継続して見取っていく、姿の変容を追っていくことが非認知領域の研究には必要であると考えられる。

子供たちは一人一人異なる個性や性格をもっている。意欲の高い子供と低い子供。自己肯定感の高い子供と低い子供。外向的な子供と内向的な子供。外国語への興味が高い子供と低い子供など、多様なグラデーションが想定される。そこで今年度はグラデーションの異なる抽出児を数名設定し、単元を通してその変容を見取ることとする。これは研究の対象を一部に限定するという意味ではない。具に個を見ることを通して、より具体的に「意欲」と「粘り強さ」が発現している姿を追うということである。本研究で扱う「意欲」「粘り強さ」は

非常に抽象的な概念であるため、見取りは可能な限り具体的な方法で行っていきたいと考える。昨年度までのワークシートの記述や対話場面の映像記録から行うスクリプト分析については継続しつつ、そこに抽出児の変容を加えることで、より具体的で客観性を担保した見取りを目指していく。

〈引用文献・参考文献〉

- ・ 文部科学省（2017）『学習指導要領』・『学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』
- ・ 国立教育政策研究所（2021）「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書」
- ・ 鹿毛雅治（2019）「学習者中心の教育環境をデザインするー学習意欲を育むためにー」鹿毛雅治 著『授業という営み』教育出版，43ー57 頁
- ・ Krashen,s(1981) Second language acquisition and second language learning. Oxford:Pergamon Press
- ・ ポール・タフ（2019）『私たちは子どもに何ができるのー非認知能力を育み，格差に挑む』英治出版
- ・ 中央教育審議会答申（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- ・ 大城賢（2017）『小学校学習指導要領ポイント総整理 外国語』東洋館出版社
- ・ 池田真（2013）『CLIL の原理と指導法』英語教育 6 月号，大修館書店
- ・ 山野有紀（2013）『小学校外国語活動における内容言語統合型学習（CLIL）の実践と可能性』
- ・ 二五義博（2015）『小学校高学年における英語科授業の実践報告』
- ・ 上田薫(1994) 『個に迫る授業』 明治図書
- ・ 佐伯胖(1975) 『学びの構造』 東洋館出版社
- ・ 国立教育政策研究所（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』